



# 戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「登場人物編」その7

—近世（江戸時代）中編—

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

## はじめに

本稿連載「登場人物編」7回目として、国策紙芝居に描かれた「近世（江戸時代）」の人物のうち、日本が世界の大航海時代の潮流に直面した時代に生きた間宮林蔵、高田屋嘉兵衛、山田長政、角屋七郎兵衛といった面々を取り上げる。筆者の関心はこれまでと同様、近代天皇制国家77年間の末期に、これら近世の人物は如何なる観点から選択され、どのように回顧されたのかという点にある。ここでは、それを「海洋国の自意識—北守南進の原点」として主題化したい。（以下、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018.2）は『国策』と略し、その作品解題を一部引用させていただく。脚本の引用部はイタリックで表記する。）

## 1. 南進の源流

●海国の民／平林博脚本；油野誠一絵画。日本教育画劇、1942.07.10 非文字所蔵

個々の人物を取り上げる前に、まずは、我が国が四辺を海に囲まれた「海洋国家」であるという地政学的な自意識を包括的に描いたと思われる作品を紹介しよう（図1～3）。



図1 「海国の民」表紙

物語は、紙芝居の演者が歌ったであろう文部省唱歌「われは海の子」の1番と2番の歌詞で幕を開ける。そして、日本という“くに”が如何に海を身近に感じながら生活してきたのかを、歴史を追って説明する形でストーリーを展開する。最初に、神功皇后による熊襲の反乱

を支援する新羅征伐が紹介され、「神の国」「神の兵隊」の征伐によって、新羅はすぐに降伏したという。その後も、文永の役、弘安の役において鎌倉武士が蒙古軍を撃退し、室町時代には八幡船（倭寇）が武勇を誇った歴史が述べられる。しかし、豊臣秀吉による朝鮮出兵の失敗。江戸時代には鎖国政策により「海国民」の活動ができなかった。だが、幕末に黒船が来航する。作品では、民謡「串本節」の「潮の岬にどんと打つ波は若い男の度胸だめし」という一節が挿し込まれる。この黒船来航以降、日本人は再び「ほんとうの姿」を取り戻し世界の海に進出し、水産日本、海運国としての地位を築き人々の生活を支える命綱となってきたことが紹介される。そして、歴史的に培われてきた海国の民としての力は、大東亜戦争においてもハワイ海戦、マレー沖海戦、ジャバ沖海戦、サンゴ海海戦において海軍力で勝利し、海運力は各戦線を支えている。最後は、今こそ、「世界第一の海国の民」として「海国魂を現そう」という言葉で締めくくられる。（『国策』解題 p.118／新垣）

朝鮮出兵（20万）の大軍を見送る秀吉を描いた（図2）では城郭と外海との近接した構図が印象的であり、本作品が創作された開戦まもない（1942年7月）という戦局認識は「大東亜海ははや我等が内海と化した」という緒戦の相次ぐ「勝利」を占領地に立てられた旗印（図3）によって描かれている。



図2 「海国の民」7景



図3 「海国の民」17景

紙芝居（語り）の背後で通奏的に流れるのは文部省唱歌『われは海の子』であった。1914年刊行の「尋常小学唱歌」第六学年用に掲載されたこの唱歌は、「海が身近な存在だったこと」「自然の香りや音を感じながら元気に成長する少年の姿」がよく映し出されており、幅広い世代に受け入れられていたようである。しかし冒頭の大らかな曲調は、4番以降の歌詞ではこの少年が心身ともに鍛え上げられた青年となり、戦争に出ていく一生が描かれる。海の男が海の国である日本を護ろうと勇ましく歌う曲へ転調し、最後の7番では「いで大船に乗出して、我は拾わん 海の富、いで軍艦に 乗組み我は護らん 海の国」となる。戦後になると、こうした部分が国防思想や軍艦など戦争をイメージさせるとして連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指示により歌詞が削られ、小学校では3番までの指導となった。

本作品が創作された1942年前半とは、日本軍のジャワ島上陸（3月1日）、ニューギニアに上陸（4月1日）に続き、ミッドウェー海戦（6月5日）が戦われ、米軍がガダルカナル島に上陸（8月7日）するという緒戦の重要な転換期に当たっており、今こそ、「世界第一の海国の民」として「海国魂」を現そうという締め言葉と戦局の現実との落差は否定しがたいものがある。

以下では、国策紙芝居の主人公となった人物を没年（判明している限り）の古い順に取り上げることしよう。

・角屋七郎兵衛（慶長15年3月17日（1610年5月10日）-寛文12年1月19日（1672年2月17日））

17世紀前半の江戸時代、東南アジア諸国との貿易に活躍した人たちがいた。彼らは、朱印状によって海外渡航の許可を得、朱印船で海を渡って行き、日本の国際化に貢献した。角屋七郎兵衛も、その一人である。伊勢松阪の豪商だった彼は、その後ヴェトナムのホイアンという町に移住し、物質的な貿易ばかりでなく、文化の交流に活躍するようになる。ところが、日本の幕府の政策により鎖国令が施行。日本人町の頭領をつとめ、30余年異郷にあって客死。彼はヴェトナムに取り残されたばかりか、その地に眠ることになった。

りか、その地に眠ることになった。

●南進の英雄：角屋七郎兵衛／森田龍男作、1942.

5.1 永田文昌堂；京都 人形劇の図書館所蔵

江戸時代初期、御朱印船で安南（今のベトナム）貿易を行った廻船商人・角屋七郎兵衛の伝記。「昭和十六年十二月八日。この日米英に対して宣戦の大詔が渙発せられた。日本民族はこの一戦争によって大東亜共栄圏の確立を目指して東亜民族の解放を叫ぼうとしたのである。南進！南進！南へ伸びて行く日本人の雄々しい歴史がここから始まる。新しい土地。素晴らしい南。そこには無尽蔵の宝庫が我々を待っている。鉄、石油、石炭、錫、麻、ゴム、コーヒー、とうもろこし、米。今日、日本に要るすべての物資が我々日本人の採掘を今や遅しと待ち構えている。南へ行こう、南へ伸びよう。南は新しい我々の天地だ」。本作はこのような気恥ずかしくなるほど手放しの南方礼賛で始まる。（図4）



図4 「南進の英雄」表紙

徳川家康は海外交易に熱心な人物で、1600年に豊後の海岸に漂着したオランダ船の航海士ウィリアム・アダムスやヤン・ヨーステンらを外交顧問として採用し（図5）、ガレオン船を建造させたほどである。関ヶ原の戦いで全国統一した1600年以降、朱印船制度によって東南アジア諸国との貿易に活躍した人たちを中心に、安南、スペイン領マニラ、カンボジア、シヤムなどの東南アジア諸国に使者を派遣して外交関係を樹立し、1604年に朱印船制度を実施した。これ以後、1635年まで350隻以上の日本船が朱印状を得て海外に渡航した。彼らは、朱印状によって海外渡航の許可を得、朱印船で海を渡って、日本の国際化に貢献した。角屋七郎兵衛もその一人で、伊勢松阪の豪商だった彼は、ヴェトナムのホイアンという町に移住し、物質的な貿易ばかりでなく、文化の交流に活躍するようになる。安南に渡り成功を収め、王族の阮（グエン）氏の娘を妻（図6）とし永住。ところが、日本の幕府の政策により鎖国令が施行される。起草者は林羅山だった。彼はヴェトナムに取り残されたばかりか、その地に眠ることになった。紙芝居『南進の



英雄』では鎖国令発出後3年以内の帰国命令を拒み、「日本の捨石になろう」「天皇陛下万歳を叫ぼう」「北隣の國との戦に支援しよう。南には無限の宝庫が待っている。南へ行こう」という決意を示す姿が描かれる。



図5 『八幡船』8景

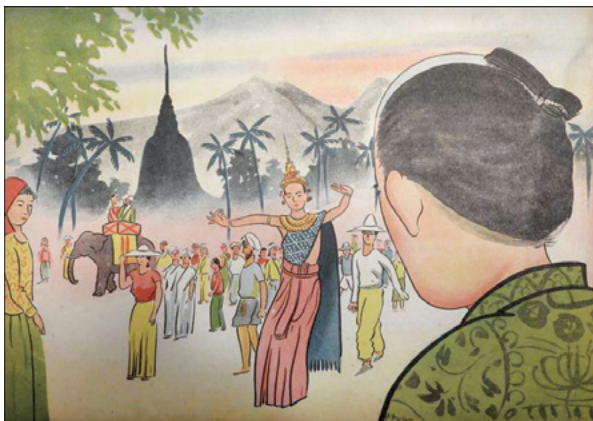


図6 『南進の英雄』8景

死後の1928年には従五位を贈位された。およそ300年後、ようやく平和を取り戻したヴェトナム・ホイアンを訪れた羽田澄子ら岩波映画製作所スタッフによって、映画「角屋七郎兵衛の物語ベトナムの日本人町」が製作、1995年12月2日に公開されている。

#### ・山田長政 (1590年?-1630年)

江戸時代前期シャム(現在のタイ)の日本人町を中心に東南アジアで活躍した伝説的人物として知られる。アユタヤ日本人町は14世紀頃に始まったとされるが、日本の戦国時代には主君を失った浪人が流れてくるようになり、急激な膨張がみられるようになった。この傾向が特に強くなるのが関ヶ原の戦い、大坂の役などの後とされる。そのなかで特に著名な人物が山田長政であり、「凶南」の先覚者として戦前期を通してもてはやされた。矢野暢編『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』弘文堂1991は、明治時代の海外雄飛の夢、空想的な南進論の中から「山田長政」という人物の伝説が生まれ、

それが大正・昭和時代の国策としての南進論のなかで、強化されたと論じる。生年は不明であるが、1590年とするものが複数散見されるほか、紙芝居『山田長政』小糸正世脚本；西正世志繪畫では台湾(高砂島)への密航の決意を長政27歳と書いており、1630年とされる長政没までの長政の活躍期間は10年を大きく出していない。1915年11月10日には贈従四位。1938年、旧日本海軍練習艦隊がアユタヤ日本人町跡地に山田長政を祭神とする「長政神社」を建立した。

紙芝居作品としては、下記の4点が確認されている。

●山田長政／小糸正世脚本；西正世志繪畫。日本教育畫劇、1943.6.25(作品番号396)

連載1：非文字所蔵

●海を渡る日本魂：山田長政：ぬり絵紙芝居／木田諒脚本；矢島健三繪畫。報道畫劇文化協會 1944.6.20 非文字所蔵

●リゴール総督 山田長政／金谷完治作；布施長春画。畫劇報國社、1942.1 大阪府立中央図書館国際児童文学館、浦上家(静岡県立大学図書館所蔵)

注\*『国策紙芝居にみる日本の戦争』解題編の記述において「所在は未確認である」としたが、これは、目録編のサブタイトル「リゴール総督」を見落としたことによる誤りであった。謝して訂正する。

●リゴール総督・山田長政／著者、出版者、出版年等不明。本資料は台湾歴史博物館との協定にもとづく提供である。(台湾歴史博物館所蔵)〈図7〉



図7 『リゴール総督・山田長政』3景

山田長政の物語が、総じて「長政の密航」、「日本人傭兵隊長としての活躍」、「最高官位に昇進後日本人町の棟梁としての信頼」を得て、「地元の有力者の娘と結婚」といった挿話を軸に展開されるのは共通であるが、作品によって特筆すべき記述も見られる。山田長政伝説のディテールをも形成するに至った背景を紙芝居作からひろってみよう。

●『海を渡る日本魂：山田長政：ぬり絵紙芝居』報道畫劇文化協會、1944.6.20：同じ密航者の老人・石田三

成の家来を名乗る人物から剣術を習い、長政の名前をもらうほか、「長政の血は脈々としてタイコクに流れ大東亜建設の固い礎となった」と描かれる。(図8)



図8 『山田長政：海を渡る日本魂：ぬり絵紙芝居』表紙

●『山田長政』日本教育畫劇，1943. 6. 25：密航の手伝いを頼む人物に長政は「外国のかたに大和魂を吹き込んで心から日本国の尊さ有難さをわからせてやろう。」「私たちは、海の国の民、日本人だ」と呼びかけるとともに、「海外には神の国人を待つ国がある、海国の民日本人よ、海へ行こう」と祖国に呼び掛ける。このように「日本」「日本人」としての特異性・卓越性を覗かせるセリフも定着されており、いはば〈神徳〉を体現した人物として扱われている。(図9)



図9 『山田長政』8景

●『リゴール総督 山田長政』畫劇報國社 1942. 1：南洋と日本人の関係は次のように描かれる。「渦まき流れる黒潮の彼—我等大東亜共栄圏内に含まれている印度支那半島、並びに南洋諸島！そこは、数百年の昔から、わが国の御朱印船や八幡船が盛んに通商貿易を営んだ土地であり、雄大な望みを抱いたわが海国男児の活動舞台だったので。」

いかがであろう。南洋風の説話的ともいえるストーリー

一のなかに溶解していくにふさわしい雄渾とも夢想的ともいべきセリフが散りばめられているとはいえないだろうか。

1914年の第一次世界大戦参戦にともない、日本海軍がドイツ領ミクロネシア（南洋群島）を占領し、戦後この地が日本の委任統治領として事実上の植民地になると、南洋群島は「内南洋」ないし「裏南洋」、すなわち「外南洋」ないし「表南洋」（東南アジア島嶼部）への進出拠点と位置づけられ、一時的な南進ブームが高まった。この時期の南進論の主流は貿易・投資・移民を軸に平和的な経済進出を唱導するものであった。

近代における山田長政の公的認知は、1915年11月の従四位追贈（大正期南進論の最盛期）であるが、南進論の国策化（1936年8月廣田内閣における「国策の基準」）にともない、大東亜共栄圏の理想を体現した英雄として再浮上してきた。

南進論とは、日本の海外発展を中国南部、東南アジアなど南方諸地域に求める主張で、早くも1880年代から提唱され、日清戦争による台湾領有、第一次世界大戦後の南洋諸島の委任統治の際にも論じられ、1930年代以降、日本における「自存自衛」理念と結びつき、「武力による南進」が志向されるようになった。北（ロシア）への戦力的備えと対比して「北守南進論」とも称される。

日清戦争後は台湾を拠点としての経済的発展が重視され、日中戦争後は軍需資源、特に石油確保のための南進論が台頭、大東亜共栄圏を唱え、仏印進駐を行って英米と対立することで、太平洋戦争へ突入した。1930年代、満州事変以降、英米との関係が悪化して日本の国際的な孤立化が進むと、「南進」はその後の国策の有力な選択肢の一つと考えられるようになり、場合によっては武力を伴ってでも実施すべきものであるとされた。1936年8月7日、廣田内閣の五相会議で対外問題を中心とすることが決定された。その内容は公表されなかったが、帝国の根本国策が「外交国防相まって東亜大陸における帝国の地歩を確保するとともに南方海洋に進出発展するに在り」とされ、「東亜共栄圏」の盟主構想が、南方進出の方針として重要国策と決定された。これによって海軍の南進論が力を得てきた。山田の英雄化はその時期と重なり、少年雑誌などでも異例の人気を博したカリスマ的人物だったのである。

## 2. 北守の原点：江戸末期の北辺をめぐる

1639年の鎖国令によってポルトガル船の来航を禁じて以来、オランダ、中国、朝鮮、琉球以外に国を鎖していた江戸時代の日本に最初に開国通商を迫ってきたのは、南下政策によって貿易の拡大と領土の拡張を図っていたロシアであった。根室に来航した第1回遣日使節ラクスマンは江戸に直航して通商を促す国書を幕府に直接手渡したいと申し出たが、老中・松平定信ら幕府当局者は長崎以外に異国船の入港は認められないとしてこれを拒



み、ラクスマンに対して長崎入港の許可書（信牌）を交付した。ラクスマンはしかし結局長崎へは向かわず、大黒屋光太夫らロシアから伴ってきた漂流者を箱館で引き渡して帰国。それから12年後、1804（文化元）年9月に、ラクスマンに与えられた信牌の写しとロシア皇帝アレクサンドル1世の親書を帯びた第2回遣日使節レザノフ一行が長崎に到着する。翌年3月まで滞在して交渉を求めたが甲斐なく親書も受理されず退去を命じられたレザノフは幽閉に近い状態を余儀なくされたうえ、交渉そのものも全く進展しなかったことから、日本に対しては武力をもって開国を要求する以外に道はないという意見を持つに至り、また、日本への報復を計画し、樺太や択捉島など北方における日本側の拠点を部下に攻撃させ帰国の途中、部下に樺太・択捉島・礼文島などの日本人入植地への攻撃を命じ、幕府の危機感をいっそう高める結果となった。

武装したロシア商船が松前藩樺太出張所などを襲撃、事実上幕府が海外列強の脅威を意識し、「開国」へ向けた準備を始めるきっかけとなったこの事件（「文化露寇」といわれた）は、歴史的にみれば「黒船」よりはるかに大きな意味を持つものであった。そのショックからか、幕府は一旦「鎖国」強化策に出る。1825（文政8）年に公布された「異国船打払令」がそれである。しかし世界の動きは加速し、日本の港への立ち寄り要請は年々増加し、幕府は1842（天保13）年「異国船打払令」を廃し、新たに「薪水給与令」を公布することで外国船の日本の港への寄港を認め始めた。この流れこそが、「開国」を視野に入れたわが国近代化への真の端緒だったと考えられるのである。

一方、当時ロシアは、ヨーロッパ方面でナポレオン一世率いるフランスとロシア戦役（祖国戦争1812年～）を、またクリミア戦争（1853～56年）を戦っており、ロシアから軍隊を派遣しようにもその余裕はなかった。しかし、江戸末期から明治期にかけて日本人の深層においてもっとも恐れていた国は西欧列強ではなく、ロシアだった。日本の北方に覆いかぶさるように位置する巨大な隣国は、常に不気味な脅威であった。「恐露病」。あるいは「露探」（ロシア本国への情報提供を秘密裡に行う密偵）といったことばが盛んに飛び交っていた。

このような江戸期の北辺の国際環境のもとにあった露西亜と日本との関係において語りつかれてきた人物として、間宮林蔵と高田屋嘉兵衛の二人を取り上げよう。

・間宮林蔵（安永9年（1780年）-天保15年2月26日（1844年4月13日））

樺太が「島」であることを確認したことで知られる江戸後期の探検家。

●間宮林蔵／足立直郎脚本。佐東大朗子絵画。日本教育画劇。1943. 10. 5 非文字所蔵

1807（文化4）年春、ロシア帝国外使節一部の択捉島紗那（シャナ）襲撃に遭遇して海防の急を知った間宮は、翌年幕府の命により樺太探検に出発。樺太東部沿岸を進むなかで「ダッタンとカラフト」の間に海峡があることを発見する。全島調査の記録・図面を調べて江戸に帰った間宮は、恩師・伊能忠敬から「海外問題への要務」に当たるよう激励され、さらに天文方奉行・高橋作左衛門（景保）を介してシーボルトに会う。作中の「択捉島紗那（シャナ）襲撃」事件とは上述「文化露寇」ともいわれ、幕府に国防の重要性を覚醒させ、鎖国体制の維持と国防体制の強化に努める契機となった。この事件は、爛熟した化政文化の華が開き、一見泰平にみえる日本であらためて国防の重要性を覚醒させる事件となった。江戸幕府の首脳はロシアの脅威を感じることとなり、以後、幕府は鎖国体制の維持と国防体制の強化に努めた。また、日露関係の緊張によって、幕府は自らの威信を保つためにも内外に対して強硬策を採らざるを得なくなった。このことは1811年のゴローニン事件の原因となった。「海外問題への要務」に当たるよう指示した師・伊能忠敬の贈正四位は1883年（壬午事変の翌年）、主人公・間宮の贈正五位は1904年（日露戦争の只中）である。（『国策』解題 p. 179／原田）〈図10〉



図10 『間宮林蔵』表紙



図11 『高田屋嘉兵衛』

・高田屋嘉兵衛 (1769年-1827年)

江戸時代後期の廻船業者・海商、北辺開拓者。淡路(兵庫県)の人。兵庫(神戸港)で廻船業を営み、蝦夷(えぞ)交易に活躍して巨利を得た。1799年幕府の命により択捉(えとろふ)島におもむき漁場を17か所設置。1812年国後(くなしり)島沖でゴローニン監禁の報復としてロシア兵に捕らえられ、カムチャツカに連行された。翌年帰国しゴローニン釈放に努力した。明治に入り北方開拓の功績を讃えられ、1911(明治44)年に正五位を追贈、1938(昭和13)年には開拓神社の祭神となった。

●高田屋嘉兵衛／堀尾勉脚本；西正世志絵画。日本教育画劇。1941.12.20 非文字所蔵

寛政12(1800)年、高田屋嘉兵衛と近藤重蔵が指揮する船が、漁場開発と土人宣撫のため、択捉島へ向かっていた。嘉兵衛は現地の住民に、太陽＝天皇陛下のおかげで仕事に励み、幸福に生きられるのだと語り、住民らは嘉兵衛を「大将」と呼んで慕った。十数年後、文化9(1812)年にロシアの船・チアナ号に嘉兵衛は拘束され、部下4人とともにロシアへ連行される。嘉兵衛自身による懸命の看病も空しく船夫らが亡くなる中、嘉兵衛はチアナ号のリコルド副艦長に掛け合い、日本へ戻る。以前日本に捕らえられたゴローニンを釈放してロシア側に引き渡すことに成功した嘉兵衛は、「北海護るべし。オロシヤ恐るゝに足らず。大和魂のゆくところ 何もの横暴も許すべからず」と誓うのだった。ゴローニン事件によりロシアに連行された高田屋嘉兵衛の活躍を描いた作品である。史実を基にしているものの、嘉兵衛が天皇の威光によって現地住民を教化する部分や、嘉兵衛が抑留されたロシアでの生活の様子には脚色が加えられている。前者については、ゴローニンのおかげで現地の住民は幸福に暮らせるのだから、これからは日本が「守つてやる」ので安心するよという、日本の支配を正当化するための論理が、嘉兵衛のセリフに表れている。後者については、実際には抑留先で一定の自由が与えられていたとされる嘉兵衛が拘束されている描写が見られる。不当な抑留の様子を強調することで、嘉兵衛の活躍をより華々しく描こうとしたものと思われる。本作からは、真面目で実直な人間が正しく、そのような人間がいる日本こそ正義であり、故に大国ロシアをも圧倒し、劣った「土人」をも教化できるという認識を見て取れる。過去の史実に借りて大東亜共栄圏の正当性を表現した典型的な作品といえよう。(『国策』解題 p.78/鈴木)〈図11〉

3. まとめとして

さて本稿はサブタイトルを「北守南進の原点」として海洋国日本の江戸期からの近代的展開を追うことを意図したのだが、対象とする時代が広すぎたこと、近代に入ってから国際関係・武力環境の変化が想定以上に激しいものであったことなどにより、当初思うようなフォローができなかった。南進論が有事に際して確保すべき海上交通路の確保を優先課題とするのに対して、北進論が武力による大陸進出と地域支配とを主眼とするのであれば、同一平面上で論じるのは難しいところであった。

ただ紙芝居作品の特徴として、国境・海洋の緊張を描く「南方」ものが伝統的南進論の再話・拡張をベクトルとしているとすれば、「北辺」ものは江戸期来の北の守りを学術調査に託した記録性・公益性が高い上記「間宮林蔵」や『學の泉：教育勅語解説』1943年1月(「学を修め」の条)に託して創作されていることを指摘しておきたい。

1936年6月には、「帝国国防方針」の改定が行われたものの、対ソ戦を第一目標にする陸軍と対米戦を第一目標にする海軍が対立し、妥協して「南北併進論」が決定する。その中で、8月7日、廣田首相、有田八郎外相、馬場鉄一蔵相、寺内寿一陸相、永野修身海相による五相会議が開催され、「国策の基準」が決定され、そこでは東南アジア進出を決め、大東亜共栄圏構想を核として後の太平洋戦争に至る重大な戦略を決定することとなった。

日米開戦を期して、堀尾勉(脚本)・西正世志(絵画)といったエース級の作家により製作された『高田屋嘉兵衛』日本教育画劇。1941.12は、当時の戦時期ナショナリズムの素朴な表出の姿を留めている。

最後に紙芝居以外の表現世界に目をむけておくことも必要であろう。遠藤周作『王国への道：山田長政』(新潮文庫)1984.3、井上靖『おろしや国酔夢譚 新装版』(文春文庫)2014.10、司馬遼太郎『菜の花の沖』全6冊(文春文庫)2016.12といった文学作品が我々に残されていることは日本の近代経験を豊富化するうえでの記念碑的遺産となっていることを特筆しておくべきであろう。

以上